

ルネサンス期ロンバルディア地方の学識

「学芸」と政治の間で…ローランド・タレンテイのケース

イエシカ・ノヴァク

阿部 ひろみ 訳

ロンバルディア地方の人文主義者が話題になった際、おそらく最初に想起されるのはピエトロ・フィラーギス (Pietro Filargis, c. 1340-1410) — 後の教皇アレクサンデル五世 —、バルトロメオ・カプラ (Bartolomeo Capra, -1433)、ないしフランチェスコ・ピッツオルパッソ (Francesco Pizzolpasso, c. 1375-1443) でしょう。そのほかにウンベルト (Umberto Decembrio, -1427) およびピエル・カンデイド・デチェンブリオ (Pier Candido Decembrio, 1399-1477)、『アントニオ・ダ・ロー (Antonio da Rho, c. 1398-1450)』、『ギヤスパリーノ・バルツイッツァ (Gasparino Barzizza, 1360-1431)』とその息子ギュイ

ニフォルテ (Guiniforte Barzizza, 1406-1463)、『それからフランチェスコ・フィレルフォ (Francesco Filelo, 1398-1481)』、『コンスタンティノス・ラスカリス (Konstantinos Laskaris, c. 1433-1501)』の名も挙げられるかもしれませんが。しかし、本報告では彼ら有名人ではなく、無名であるものの大変興味深い、シラノ出身の人物ローランド・タレンテイ (Roland Talenti) に注目します。彼は、バイエー大聖堂内の無原罪の受胎礼拝堂にある記念銘板によると「様々な小作品の著者」です。この銘板は一九世紀半ばに司教座聖堂参事会員のカミーユ・ジャック・ラフテー (Camille-Jacque Laffetey) ¹⁾ の働きかけで取り付けられま

ルネサンス期ロンバルディア地方の学識「学芸」と政治の間で…ローランド・タレンテイのケース（ノヴァク）

した。

この礼拝堂の真ん中にある墓に、ローランドとアントニオ・タレンテイが眠っている。彼ら兄弟はミラノ出身で、バイユー教会の司教座聖堂参事会員であり、再建されたこの聖マリア礼拝堂に寄付を行った。はじめの者は、聖堂参事会副会長であり、様々な小作品の著者であり、一四七三年五月七日に没した。もう一人の者は、一四七八年一月一五日に没した。

この記念銘板の文面は全体的にみて、現存しない墓碑に基づいています。これについては、カミーユ・ジャック・ラフテーが文章とスケッチによる説明を残しています。既にラフテーの時代には、書かれた墓碑銘文はたった七単語がぼんやりわかるくらいになっていましたが、ラフテーは元の銘文を知ることが出来ました。というのも一五〇年さかのぼる一八世紀初めに、ジャン・エルマン (Jean Hermant, 1650-1725) がこれを解読して、バイユー司教区の歴史という著作に書きとめていたからです。³⁾

ここにマギステルであり聖堂参事会副会長のローランド・タレンテイおよびマギステル、アントニオ・タレン

テイ、ミラノ司教区出身でこの尊ぶべき教会の聖堂参事会員であった兄弟が眠る。彼らは、この聖なる受胎礼拝堂に寄付を行い、再建させた。前述の聖堂参事会副会長は一四七三年五月七日に、アントニオは一四七八年一月一五日に没した。彼らの魂のために祈りなさい。

興味深いことに、元々の銘文ではローランド・タレンテイが「様々な小作品の著者」であった、ということは書かれています。ラフテーがローランド・タレンテイの文学的作品について書き加えたということは、私たちの関心をひきつけます。ジャック・ラフテーは都市バイユーの図書館員でもあり、このミラノの手による特別な作品集に力を入れて取り組んだことが背景にあります。タレンテイの作品集とは、一冊の広範な内容をもつ写本で一四三一年から一四六〇年の間にローランド・タレンテイによって執筆された書簡と演説が書き写されています。ラフテーは一九世紀半ばに、その当時まだ写本内に残されていた作品についてリストを作成し、本の先頭に糸で括りつけました。彼は、最初のページには、この手書き本の歴史についての書き込みもしています。³⁾ さらに、冒頭部分が欠落した作品にも見出しをつけ、既に断片的になっていた本に新たなページ番号を付したのも、おそらくラフテーでしょう。³⁾ そのペ

ージ番号からは一九世紀半ばにはとうに半分以上のページが欠落していたことが明らかになります。大きな欠落は、バイユーの聖堂参事会図書館も一五六二年に被害を受けた、ユグノー戦争の結果かもしれません。しかし、この写本は以下で示していくように「学芸」(artes)と政治の両領域にまたがるような作品を含んでいるため、いくつかの文章作品は政治的な問題から意識的に本から切り離された可能性も考えられます。さらに、重要人物や人文主義者グループ内の代表的人物に宛てられた書簡は貴重であると見なされ、別な場所ので保管するために本から取り除かれたのかも知れません。またこの本は、見出しが赤色で装飾されているのみならず、章の始めの飾り大文字も実に豪華に書かれています。青いロンバルディア書体の上には赤い花形装飾がつけられ、繊細な白い蔓で飾られた赤と青の背景の上には金色で文字が書かれているといった風です。特に作品の冒頭部分が欠けているケースが多いことから、そうした美しいページへの物欲やそれを売りさばく金銭的欲求から失われた可能性もあるでしょう。そのほかに、ひよっとすると個々の文章作品や特定の章句は、別な場所です手本として使うために写本から切り取られたのかもしれない。こうした様々な理由で写本から作品が失われていったと考えられます。

この写本が持つ「学芸」は、—当然ながら—本の装飾のみに尽きるわけではありません。確かに中に含まれている文章作品の一部は、芸術に関する内容を含んでいます。ただこの写本の特別な点は、特定の一種類ではなく、さまざまな形式の文章が含まれていることです。欠落が多いことから、元々はより大きな多様性を持っていた可能性もあります。とはいえ、現存している作品だけでも十分バラエティーに富んでいます。また、欠落部分の多さから、完全には推測の域を超えないとはいえ、この本には明確な傾向が見いだされず。一人の熟練した人文主義者とは難なく様々な文体を使いこなせるべきである、とでもいうように、ローランド・タレンティは自らが幅広い種類の文章を執筆できることを示しています。スザンヌ・セイジンは次のように評しています。

この集成本は書簡形式集というより、むしろ文章形式集である。タレンティはこの本を、長い間文化的に疲弊し戦争に苦しめられたノルマンディーにあっても、様々な機会に模範的な演説、模範的な書簡を執筆することができるという、自身の能力を示すミニメントにしようとしていたのだらう。⁸⁾

ルネサンス期ロンバルディア地方の学識「学芸」と政治の間で…ローランド・タレンティのケース（ノヴァク）

私も大方においてセイジンに同意します。ただローランド・タレンティが自分自身、ないしほかの人々に対して、長期間にわたる百年戦争で疲弊したノルマンディーにあっても、いまだに文学的に高度な作品を生み出せる状態にあることを証明しなくてはならなかった、という可能性は低かったと思っています。むしろ私は、一既に数年前に別なところでも述べたのですが、この集成本は政治的な意図に基づいて作成されたもので、よって「学芸」と政治の一種の収斂の形を示していると考えているのです。文章作品の集成がなされた動機について私の考えをあらためて説明する前に、以下で、このミラノ人が写本に含めることにしたバラエティーに富んだ演説 (*orations*) と書簡 (*epistolae*) を紹介します。まず演説から見ていくことにします。

ローランドは言うまでもなく、長い演説原稿を執筆し、さらにそれを有意義に雄弁に語ることが出来たため、重要な場面で演説する機会を与えられていました。写本の一番はじめに、神聖ローマ帝国国王ジギスムント (*Stigismund*, 1368-1437) がロンバルディアにやってきた際にローランドが行った演説が書き込まれているのは偶然ではありません。この中でローランド・タレンティは、スキピオ・アフリカーヌスやルキウス・アエミリウス・パウルス・マケド

ニクス、そして偉大な軍人の列挙では欠かすことのできないユリウス・カエサルを引用しながら、自らの歴史的・文学的な教養を披露しています。一四四四年に和平条約が結ばれた際の祝いの挨拶 (*oratio gratulatoria*) として、キリスト教の諸侯に祝辞を送ったのもローランドでした。

一四五二年にバイユーにおいて枢機卿エストウツトヴイル (*Guillaume d'Estouteville*, c. 1412-1483) の前で作られたような迫力ある十字軍遂行の呼びかけであれ、これは写本の中で一六ページ以上を占めて収録されており最も長い作品の一つです。司祭職の権利と義務に関する説教 (*sermons*) であれ、これも少なくとも一八枚のページを使って収録されています。とにかくローランド・タレンティはあらゆるタイプの文章を巧みに執筆することができました。彼がいかに自らの演説や説教を誇りに思っていたか、どれだけ大きな価値を見出していたか、ということは、百年戦争末期で羊皮紙が高価であったにも関わらず、作品を長い形のまま完全体で写本に収録していること、そののみならず、表題部分にその演説が彼の筆によるものである、ないし、彼によって語られたものであるということがはっきり明記されていることから読み取ることが出来ます。「バイユーにおいて尊敬すべきルーアンの枢機卿の面前で同タレンティによって行われた演説」あるいは、「バイユーの

ある公会議で同マギステル・タレンティによって行われた「説教」というように記されています。

またローランド・タレンティはよき秘書官として当然のことながら、多様な形式の書簡を執筆することができ、それらも写本に収められています。ここで、二番目の文章ジャンル、書簡に目を移します。このミラノ人は、人文主義者教皇ニコラウス五世が教皇の位に就いた際（一四四七年）¹⁵、また教皇カリクトゥス三世の登位の際（一四五五年）¹⁶にバイユーで祝賀書簡（*epistolae congratulatorie*）を執筆しています。後者への書簡では、タレンティは速やかな十字軍遂行も鼓舞しています。十字軍は人文主義者の間ではコンスタンティノープル陥落前からよく論じられたテーマで、とりわけ、その在位期間中に写本が成立したと考えられる教皇ピウス二世にとって大きな関心事でした。それゆえ十字軍に関するもう一通の書簡、フランス王シャルル七世（Charles VII, 1403-1461）に宛てた勸告書簡（*epistola exhortatoria*）も写本に収められたのでしょう。¹⁷

十字軍の呼びかけに政治的要素があることを否認できないとすると、ほかの、重要な支配者達に宛てた文章作品に見られる政治的含意はさらに大きいものであるといえるでしょう。百年戦争の文脈にとどまらずと考えると、フランス王シャルル七世のノルマンディー（再）征服に際してバ

イユー司教と聖堂参事会が一四五〇年に開催した祝宴を主題とした記念文書がその例として挙げられます。さらに、一四四三年に二人のイングランド人、ヨーク枢機卿のジョン・ケンプ（John Kemp, c. 1380-1454）とグロスター公ハンフリー（Hamphrey, duke of Gloucester, 1390-1447）に宛てた勸告書簡も同様です。その書簡で、ローランド・タレンティはノルマンディーで続いている苦境について訴えています。¹⁸ ミラノに関することでは、ローランド・タレンティはミラノ公フィリッポ・マリア・ヴィスコンティ（Filippo Maria Visconti, 1392-1443）の死後、アンブロジーアーナ共和国が立国を宣言した際に熱のこもった、陶酔した書簡を執筆し、一四四八年に再び勝ち取られた自由を称賛しています。¹⁹ そして、当然のことながらブルトゥス等、共和国主義を象徴するような古典期の人物に言及しています。²⁰ もちろんキケロ（『義務について』一：五七）も引用されています。²¹ フランス人やイングランド人に宛てたものよりも、イタリア人に宛てた書簡の中で人文主義的な思想への言及や引用が多いのはそう驚くには値しないでしょう。写本にはイタリア人に宛てた文章作品が絶対的に多く含まれており、収録されているものの半分以上を占めています。宛先の中で、おそらく最も有名なのは、重要な人文主義者ピエル・カンディード・デチェンブリオーこの

ルネサンス期ロンバルディア地方の学識 「学芸」と政治の間で…ローランド・タレンティのケース（ノヴァク）

名前は洗礼の際に彼を取り上げ、後に教皇アレクサンデル五世となったピエトロ・フィラーギスに負っています。ローランド・タレンティは、この一四一九年からミラノ公フィリッポ・マリリア・ヴィスコンティのもとで職を得ていたピエル・カンディード・デチェンブリオとの文通をととても誇りにしていたようで、自らがデチェンブリオに宛てた二通の書簡のほかに、デチェンブリオからの書簡も一通、写本の中に収めています。このような名譽は—残存している書簡を見る限り—、ほかのどの文通相手にも与えられていません。ローランド・タレンティは、デチェンブリオに対する感動を、「最も愛すべきいとこ（ないし甥）であるマルコ・コリオ (Marco Corio) にも伝えていたようです。コリオはローランド・タレンティの傍らで筆写係として七年間を、ノルマンディーにあるミラノ出身のバイユー司教ザノーネ・ディ・カステイリオオーネ (Zanone di Castiglione, 1459) の宮廷で過ごしました。ピエル・カンディード・デチェンブリオと知り合いになることを熱望していたマルコ・コリオが彼の作品を書き写していたということも「学芸」と政治の結びつきを明示しています。また、ノルマンディーにいたミラノ人グループは、ピエル・カンディード・デチェンブリオによるプラトンの翻訳書をイングランドへ伝えることを計画しましたが、それはそれ

までノルマンディーで彼らを庇護してきた、文学趣味のないボーフォートの怒りをかうことなく、愛書家であるグロスター公ハンフリーの好意を引き出そうと望んだからでした。

このかなり政治的な動機に基づいた、人文主義的作品の伝播に関わっていたのはローランドの親戚の中でマルコ・コリオだけではありません。ローランドの兄弟、アントニオ・タレンティ—冒頭で挙げた墓碑から読み取れるようにやはりバイユーの聖堂参事会員で、当時設立されたばかりのカーン大学で世俗法を教えていました—が、上述の伝播に関わっていた可能性があります。兄弟の父親であるガブリエル・タレンティはミラノの遠隔地商人でしたが、ピエル・カンディード・デチェンブリオの書簡からはこの父親が、ピエルによるプラトン『国家』の翻訳の一部をミラノから息子のもとへ届けたことが読み取れます。

ピエル・カンディード・デチェンブリオとその主人であるミラノ公フィリッポ・マリリア・ヴィスコンティ—この公には二通の手紙が宛てられています—のほかに、ローランド・タレンティの写本では、人文主義的な教育を受けた者、ないし少なくとも人文学 (humaniora) に関心を持っていた者の内、どのような人物が手紙宛先として見出されるでしょうか。まずミラノ市民ジャコモ・デル・ポッツ

オ (Giacomo del Pozzo) が挙げられます。彼は大変賢明な人物で、長期間にわたり熱心に研究を行った後に博士号を得ました。彼は、ローランド・タレンティから勉学にかまけ、新たに娶った妻と彼の子供たちをなおざりにしないように戒められています³⁰⁾。それから、カステイリオーネ一族が挙げられます。つまり、同じくミラノ出身のバイユー司教ザノーネ・デイ・カステイリオーネー彼はローランド・タレンティや、パノルミータ (Panormita / Antonio Beccadelli, 1394-1471) およびフランチェスコ・フィレルフォと同様にギヤスパリーノ・バルツイツアのもとで人文主義的な教育を受けていましたーの親類です³¹⁾。グアルネリオ・デイ・カステイリオーネ (Guarnerio di Castiglione) —ローランド・タレンティは彼に一通の書簡を宛てていますーは、ギヤスパリーノ・バルツイツアの弟子でした。さらについてに触れておくと、ギヤスパリーノの死に際して、ローランド・タレンティは感動的な弔慰書簡 (*epistola consolatoria*) を故人の息子であるギュイニフォルテに送っています³²⁾。ここでは、もちろんキケロへの言及がなされています。

一族の父親的存在で、その支援者兼保護者であった枢機卿ブランド・デイ・カステイリオーネ (Branda di Castiglione, -1443) の死に際しては、ローランド・タレンティはザノーネ・デイ・カステイリオーネの依頼を受けて弔慰書簡を執筆し、ミラノ公宮廷においてフィリッポ・マリーア・ヴィスコンティの重要な顧問であったグアルネリオ・デイ・カステイリオーネに送っています³³⁾。これは、グアルネリオ・デイ・カステイリオーネ自身がその雄弁さを人文主義者グループ内で認められていた人物で、実際一四四三年、上述のブランド・デイ・カステイリオーネの死に際して弔辞を任ざれていることを鑑みると、特筆すべきことです。さらに、「学芸」と政治の間を巧みに歩んでいたグループについて注目に値し、また特徴的でもあるのは、グアルネリオ・デイ・カステイリオーネもザノーネ・デイ・カステイリオーネもジョバンニ・デイ・カステイリオーネ (Giovanni di Castiglione, -1460) も、すべての政治変革をうまく切り抜けたことです³⁴⁾。

ローランド・タレンティがザノーネ・デイ・カステイリオーネに頼まれて執筆した弔慰書簡はグアルネリオ・デイ・カステイリオーネのみならず、同じくカステイリオーネ家のフランチェーノ・デイ・カステイリオーネ (Franchino di Castiglione, -1462) にも送られています。フランチェーノは多くの観点からグアルネリオと似ています。彼は両法博士かつミラノ公の助言者で、グアルネリオと共に多くの政治活動を遂行しました。また雄弁術でも高い評価

ルネサンス期ロンバルディア地方の学識「学芸」と政治の間で…ローランド・タレンティのケース（ノヴァク）

を受けており、フィリッポ・マリニア・ヴィスコンティの娘ビアンカ・マリニア（Blanca Maria Visconti, 1425-1468）の結婚式の際に、演説の依頼を受けています。人文主義者の間でもフランチェーノは尊敬されており、フランチェスコ・フィレルフォ、コズマ・ライモンディ（Cosma Raimondi, c. 1400-1435）、フランチェスコ・バルバロ（Francesco Barbaro, 1390-1454）やグアリノ・ヴェロネーゼ（Guarino Veronese, 1374-1460）と密な交流を持っていました⁽³⁸⁾。

全体的にみると、ローランド・タレンティが弔慰書簡（*epistolae consolatorie*）というジャンル―これは彼の写本の中で祝賀書簡（*epistolae gratulatoriae*）、忠告書簡（*epistolae monitoriae*）、嘆願書簡（*epistolae petitoriae*）、弁明書簡（*epistolae excusatoriae*）、勸告書簡（*epistolae exhortatoriae*）および感謝書簡（*epistolae gratias agentes*）と並んで収められています―を、高く評価していたことが確認されます。前述したギュイニフォルテ・バルツイツァに宛てたものと、枢機卿ブランダ・デイ・カステイリオネの死に際して書かれた弔慰書簡のほかに、一四四三年に枢機卿ブランダが没した際に弔意を表すと同時に援助を求める書簡が枢機卿ヘンリー・ポーフオート（Henry Beaufort, 1447）⁽³⁹⁾、ルーアン大司教ルイ・ド・

リュクサンブール（Louis de Luxembourg, 1418-1443）⁽⁴⁰⁾、教皇エウゲニウス四世（Eugenius IV, 1383-1447）⁽⁴¹⁾、そしてローディ司教である枢機卿ジェラルド・ランドリアニ（Gerardo Landriani, 1445）⁽⁴²⁾に宛てて送られています。同じ機会にさらに二通の書簡が執筆されていますが、冒頭部分が欠落しているため誰に宛てられたものかは不明です⁽⁴³⁾。

注目すべきは、枢機卿ブランダの死に際しては一連の書簡群が写本に収録されているのに対して、ローランドが長い間仕えていたザノーネ・デイ・カステイリオネの死に際しての書簡は一通しか収められていないという点です⁽⁴⁴⁾。このことは、ザノーネ・デイ・カステイリオネが没した一四五九年と写本の推定成立時期一四五九―一六〇年が重なることを考えると、一層興味深いことです。なお、この成立時期は、写本に収められた最後の七つの文章作品のインクの風合いが同じこと、さらに新司教ルイ・ダルクール（Louis d'Harcourt, 1429-1479）の治世期に書かれており、それ以前の収録文章とは異なり年代順に並べられていること⁽⁴⁵⁾、一四五九年の文章（四作品）と一四六〇年の文章（三作品）⁽⁴⁶⁾の間にはページ番号の欠落がないことから推測されます。ザノーネ・デイ・カステイリオネの死に際して執筆された弔慰書簡は、故人の重要性を鑑みると写本に収め

られているよりも数多く存在したに違いありません。しかし上述したように、写本には一通のみ、ミラノ公フランチェスコ・スフォルツアの秘書官チッコ・シモネッタ (Cicco Simonetta, c. 1410-1480) に宛てられたものしか収録されていません。これを除いては同じ機会に執筆されたであろう書簡が写本内に含まれていないことは、前後にページ欠落がないことから、かなりの確実性をもって言うことができます。ところで、チッコ・シモネッタは書簡の宛先として興味深い人物です。彼はエリザベッタ・ディ・カステイリオネ (Elisabetta di Castiglione) — ザノーネの姉妹カテリナ (Caterina) の娘の一人 — との結婚を通してカステイリオネ家と強く結びついていました。チッコ・シモネッタは大変頭が切れ、ラテン語、ギリシヤ語、ヘブライ語に精通していたほか、送付途中で奪われた他国の外交文書の暗号解読についての論文を執筆し、ミラノ公宮廷の暗号をより精巧なものにしました。

写本の中で言及されミラノで暮らしていたカステイリオネ家のメンバーは上述した以外にさらに数人が挙げられます。ザノーネの甥であるピエロないしピエル・アントニオ・ディ・カステイリオネ (Pier Antonio di Castiglione) にはローランド・タレンティから一通の書簡が宛てられています。ピエロはノルマンディーにいた彼

の兄弟ブランド (Brandia) に、健康上の理由から法学の勉強を続けたいつもりであると伝えてきましたが、それに対してタレンティは世俗法 (*ius civile*) が退屈すぎるのならば、少なくとも教会法の勉強は修了すべきである、と書き送っています。なぜなら教会法の勉強はすぐに大いに活用することができ、利益を得ることができるから、と。さらに触れておくべきなのは、やはりザノーネの甥であるギユイニフォルテ (Guiniforte Visconti) — ザノーネの姉妹カテリナとギヤスパール・ヴィスコンティ (Gaspare Visconti) の息子であり、チッコ・シモネッタの妻エリザベッタの兄弟 — が「書簡の中の代名詞は単数形を用いるべきかあるいは複数形か」という彼にとって気がかりな問いについてローランド・タレンティに相談していたことです。このことはミラノには彼がそれについて情報を得ることをできたであろう、沢山の人文主義者がいたことを考えると興味深いことです。彼の親戚でもあったグアルネリオ・ディ・カステイリオネと関わりのあるミラノの学識者グループを挙げるだけで十分でしょう。ローランド・タレンティとギユイニフォルテ・ヴィスコンティは直接会ったことは一度もありませんでしたが、ローランド・タレンティはキケロを引き合いに出しながら、会ったことのない人々をも徳をもって愛すべきであると語っています。

ルネサンス期ロンバルディア地方の学識「学芸」と政治の間で…ローランド・タレンティのケース（ノヴァク）

ローランド・タレンティのほかの書簡の一節も注目に値します。徳や文学についての学術的知識によって、人は無名の重要でない場所でも名声を得ることができる、と書かれています⁵¹。同書簡の中には、同じ意味合いで以下のようなことも記されています。この「宝物」は人がどこに行こうとも、その人を裕福で名望のある人物にする、と⁵²。ローランド・タレンティは、間違いなく自らの経験からこうしたことを語っています。ただ、彼は常にとりわけ巧みに自らの文学的素養（*scientia litterarum*）を活用することが出来たのですが、彼がいかに賢くこれを行っていたか、ということとは、写本が単に美的観点から良い出来栄えの作品を集成したものではない、ということから読み取ることができません。ローランド・タレンティが写本に収録された文章作品のことを大変誇りに思っていたことは確かです。実際、アントニオ・ベッカリア（Antonio Beccaria, c. 1400-1474）⁵³やトムマーズ・フランコ（Tommaso Franco）及びその他の学識高い文通相手が見いだされます。しかし私の考えでは、この文章作品の集成は第一に政治的な目的でなされました。既に説明したように作品の並べ方から、写本は一四五九ないし一四六〇年に成立したと推定されま⁵⁴す。ちょうどこの時期にザノーネ・デイ・カステイリオ⁵⁵が没し、その後継者ルイ・ダルクールから好意を得るこ

とが重要でした⁵⁶。この状況を鑑みると、写本が作成された第一の理由が浮かび上がります。つまり写本は、特別な冊子—一種の「就職応募用書類」—として作成されたのでしょうか。写本の中で、ローランド・タレンティは秘書官の職務に必要なすべての分野の文章を巧みに執筆できること、単に古典文学の精通者であるだけでなく、神学者としても相当な能力のあること、大物の前で演説をしたことがあり、当時の指導的人物、重要人物と当たり前のように文通していたことを示しています。また、ローランドが新たな、フランス王シャルル七世と密な関係を持つ司教の元で自らの職を保持しようとしていたと考えると、これまでもいかに忠実にフランス人と結びついてきたか、ということを表現する冊子にすることが重視されたはずで、当然、親イングラント傾向の文章は意図的に省かれ、実像は歪められています⁵⁷。実際のところは、ローランド・タレンティとザノーネ・デイ・カステイリオは二〇年以上にわたりにイングラント人と大いに協力していました。ただ、これは本報告の議論の枠外にある別のテーマとなります。

註

- (1) つれづつは以下を参照。Camille-Jacques Laffetay, *Mémoire sur les fondations, les obits et les sépultures de la cathédrale de Bayeux*, Bayeux, 1853, pp. 72-3.
(2) フォンテーは「次のように描写」“pierre magnifiquue de 3^m 33^e de long sur 1^m 62^e de large [...] a conservé la trace de deux effigies, couronnées de pinacles, et tournées vers l'orient” (Laffetay, *Mémoire sur les fondations*, pp. 72-3). スケッチは同書九七頁。
(3) Jean Hermant, *Histoire du diocèse de Bayeux. I^{re} partie, contenant l'histoire des évêques, avec celle des saints, des doyens et des hommes illustres de l'église cathédrale ou du diocèse*, Caen, 1705, p. 377.
(4) Ce livre appartenait à M. Jean Le Febvre curé de La haie piquenot. — Donné en 1690 à Mr. l'official de Mgr. François de Nesmond Evêque de Bayeux. Signé : Le Febvre.
(5) このメモは、ラ・アイユ・ピックの主任司祭ルフェビュールが書いたところも読みづらい注意書きと関連している。(Bayeux, *Bibl. Mun.*, MS 5, fol. 33r.) それ以前、この手書き写本は「騎士修道会士」(chevallier de l'ordre) プランクス出身の下級貴族 gentil homme ordinaire de la France) である「ピキステル・トブス・ヌメル」(Maistre Thomec Hamel) に属していた。一六九〇年にルフェビュールがこの写本をバイユー司教の主席判事であるジャン・プティにゆだねた、ということは別の「印刷された」

書を読み取るのが出来る。以下参照。

- Ex Bibliotheca M. Ioannis
Petite Melodunensis Pro-
tonotarii Apostolici, Offi-
cialis Bajocensis & Cano-
nici de Amaeyo. Et ejus-
dem domo Bibliothecae ca-
puli Bajocensis 1690.
(ヴェジニエの司教座参事会図書館の再建については、以下参照。Michel Bézières, *Mémoires pour servir à l'état historique et géographique du diocèse de Bayeux* [Bayeux, 1742, repr., Gaston Le Hardy (ed.), Rouen, 1895, 1:299].)
(5) 例えば以上の作品を参照。Ad serenissimum Caesarem *gratulatoria* (Bayeux, *Bibl. Mun.*, MS 5, fol. 4r.) 以後「右」の方の「インクで付されたフォリオ」(ヴェーシ)番号を番号に引用しよう。
(6) 写本は紙の束を複数縫い合わせた形で構成されているが、三六二一、二一五番目の束は完全に失われている。
(7) つれづつは以下を参照。Bézières, *Mémoires*, 1:296.
(8) Susanne Saygin, *Humphrey, Duke of Gloucester (1390-1447) and the Italian Humanists, Brill's Studies in Intellectual History*, 105, Leiden et al., 2002, p. 142.
(9) Jessika Nowak, “Der Codex des Rolando Talenti – Abbild eines wahrhaften ‘Netzwerkes’ oder Spiegel eines bemerkenswerten Kunstwerkes?“, in Kerstin Hitzbleck and Klara Hübner (eds.), *Die Grenzen des Netzwerkes*

ルネサンス期ロンバルディア地方の学識「学芸」と政治の間で：ローランド・タレンティのケース（ノヴァク）

- 1200-1600, Ostfildern, 2014, pp. 65-92. やびに二〇〇三年九月、フランクフルトのゲーテ大学のクリスチット・ツェラー教授のもとに著者によるマギステル論文『ローランド・タレンティの世界—ノルマンディーに伝来するあるイタリア人文主義者の写本についての研究—』(*Die Welt des Rolando Talenti. Studien zum Codex eines italienschen Humanisten in der Normandie*)が提出された。
- (10) 残念ながら、この演説の最初の三枚は失われてしまった。
(11) *Laudamus enim magnifica gesta Scipionis Africani, Pauli Emiliti, Iulii et Augusti Caesaris ac ceterorum excellentissimorum virorum qui bellicis in laudibus fluere* (Bayeux: Bibl. Mun., MS 5, fol. 4r).
- (12) *Ibid.*, fols. 70r-71v.
(13) *Ibid.*, fols. 73r-80v.
(14) *Ibid.*, fols. 80v-88v. 残念ながら最後の部分は失われている。次の作品は、九七頁(表)からほじり取ったものである。この作品は残存しているよりずっと長かった可能性がある。
(15) *Ibid.*, fols. 50v-53v.
(16) *Ibid.*, fols. 60v-62v.
(17) *Ibid.*, fols. 59r-60v. 書簡の冒頭は失われている。この書簡は今回復り上げている写本内のほかに、パリの国立図書館に二つの版が、またシヤンティイーにあるコンテ美術館に複写したものが一つ、残されている。(Paris, Bibliothèque nationale de France, MS lat. 3127, fols. 154v-157r; *ibid.*, MS lat. 8757, fols. 53r-57v; Chantilly, Musée Condé, MS 438 [987; XIV F 25], fols. 67v-72v.
- 以下も参照。Paul Oskar Kristeller, *Ier Italicum. A Finding List of Uncatalogued or Incompletely Catalogued Humanistic Manuscripts of the Renaissance in Italian and other Libraries*, vol. 3, London et al., 1983, p. 206f.
(18) Bayeux, Bibl. Mun., MS 5, fols. 53v-55v. これは最後の部分が欠落している。
(19) シモン・ケンプに宛った書簡の刊行は以下を参照。Henri Deniffe, *La désolation des églises, monastères et hôpitaux en France pendant la guerre de Cent ans*, vol. 1: *Documents relatifs au XV^e siècle*, Paris, 1897; Bruxelles, 1965, pp. 530-2. クロスター公に宛った書簡の刊行は以下を参照。Deniffe (*ibid.*, pp. 526-9); Alfonso Sammut, *Uyfredo Duca di Gloucester e gli Umanisti Italiani, Mediceo e l'umanesimo*, 41, Padua, 1980, pp. 223-5.
(20) Bayeux, Bibl. Mun., MS 5, fols. 107^{bis}r-108r.
(21) *Ibid.*, fol. 107^{bis}rv.
(22) *Nam, ut M. Cicero in officiis inquit: Carri sunt parentes, carri liberi, carri propinqui familiares, sed omnes omnium caritates patria una complectitur ...* (*ibid.*, fol. 107^{bis}v).
- (23) *Ibid.*, fol. 40rv. 刊行: Thno Poffano, "Umanisti italiani nel secolo XV", *Rinascimento*, 15, 1964, pp. 3-34 (pp. 26-7).
- (24) Bayeux, Bibl. Mun., MS 5, fol. 40v. バイユーの写本では、この書簡のうちたった六行しか残存していない。しかし、この書簡の文章はイタリヤの古文書に完全な形で残されている。(Florenz, Biblioteca Riccardiana, MS 827, fols. 55v-56v.) この書簡は以下に刊行されている。Poffano,

“Umanisti”, pp. 28-9. おさむ(へん)の書簡は以下にも収録
 され、Valladolid, Biblioteca Universitaria, MS
 325, fol. 35v. 以下を参照。Paul Oskar Kristeller, *Her
 Italian. A Finding List of Uncatalogued or Incompletely
 Catalogued Humanistic Manuscripts of the Renaissance
 in Italian and other Libraries*, vol. 4, London et al., 1989,
 pp. 660-1.

(25) 少なくともローランドがシラノに戻っていた親戚に
 持たせた推薦状からは、マルロ・コロオもピエル・カ
 ンデーの著作物を熱心に研究していたことが読み
 取れる。(Bayeux, Bibl. Mun., MS 5, fol. 59v. 以下を参
 照。Foffano, “Umanisti”, p. 30; Heribert Müller, “Der
 französische Frühhumanismus um 1400. Patriotismus,
 Propaganda und Historiographie”, in Johannes
 Helmuth, Ulrich Muhlack and Gerri Walthar (eds.),
*Diffusion des Humanismus. Studien zur nationalen
 Geschichtsschreibung europäischer Humanisten*,
 Göttingen, 2002, pp. 319-76 [p. 358].)

(26) *capitis amore sapientie tue summiore desiderat te revereri
 presentem, quem tantopere dilexit absentem* (Bayeux,
 Bibl. Mun., MS 5, fol. 50v; ediert bei Foffano, “Umanisti”,
 p. 30).

(27) ピエル・カンデー・デチェンブリオはイングランド
 との接触を促進することを望み、この間にフランチェス
 コ・ピンツォロパツォにも相談をしていた。この行動や、
 そこから生じたピエル・カンデー・デチェンブリオ
 のローランド・タレンティをなだめる内容をもつ書簡につ

いては以下を参照。James Hankins, *Plato in the Italian
 Renaissance, Columbia studies in the classical tradition*,
 17/1, Leiden, 1990; repr. Leiden, 1994, 1, p. 125.

(28) *Nam si eiden [Humphrey] gratias fuerit labor meus, opere
 genitoris tui, viri optimi, ad te particulas mitam ...*
 (Bayeux, Bibl. Mun., MS 5, fol. 40v. 以下を参照。Foffano,
 “Umanisti”, p. 27; Müller, “Frühhumanismus”, p. 357, n.
 10).

(29) Bayeux, Bibl. Mun., MS 5, fol. 111rv.

(30) *Ibid.*, fol. 39r.

(31) R. G. G. Mercer, *The Teaching of Gasparino Barzizza
 with special reference to his Place in Paduan Humanism*,
 Texts and dissertations. Modern Humanities Research
 Association, 10, London, 1979; Tino Foffano, “Tra Padova,
 Parma e Pavia. Appunti su tre allievi di Gasparino
 Barzizza”, *Quaderni per la storia dell'Università di
 Padova*, 1969, pp. 29-51; Id., “La mediazione culturale
 di alcuni discepoli di Gasparino Barzizza, di Vittorio
 da Feltr e di Guarino Veronese in Francia ed in
 Inghilterra”, in Luisa Rotondi Secchi Tarugi (ed.),
*Rapporti e scambi tra umanesimo italiano ed umanesimo
 europeo. L'Europa è uno stato d'animo [Atti del Convegno
 internazionale, Chianciano-Pienza, 19-22 luglio 1999]*,
 Caladescopio, 10 (Mariani, 2001), pp. 575-84.
 (32) Bayeux, Bibl. Mun., MS 5, fol. 38v.
 (33) *Ibid.*, fols. 35v-36r.
 (34) グアルネリオは一四二六年にシラノ公からの依頼で、

ルネサンス期ロンバルディア地方の学識「学芸」と政治の間で…ローランド・タレンティのケース（ノヴァク）

ツ王ジギスムントに対ヴェネツィアおよび対サヴォイへの援助を要請する、印象深い演説を行っている。彼が人文主義者のグループ内でいかなる評価を受けていたか、というところはピエル・カンデイド・デチェンブリオが自らの作品の進捗状況を報告していたことから推測される。（これに関するグアルネリオに宛てられた書簡は以下に伝来してゐる。Vallardi, *Biblioteca Universitaria*, MS 325. 以下を参照。Kristeller, *Ier Italcum*, 4, p. 660.）ちなみにピエル・カンデイド・デチェンブリオは元タニコロ・アルキムボルディNiccolò Arcimboldiに宛てたる予定だった文法書*Grammaticon*をグアルネリオに捧げている。また、グアルネリオに対する評価は、アントニオ・ベッカデリAntonio Beccadelliに「保護者」の一人と表現されている。フランチェスコ・フィレルフォの二番目の「宴会*Convitiunum*」の中で「対話相手*collocutores*」の一人として現れる「*chi*」は、アントニオ・ダ・ローの「ラクタンティウスの誤りについで*De Lactantii erratis*」とタイトル付けられた対話の中で対話相手として登場することからも読み取ることができ、ちなみにフラヴァイオ・ピオンズFlavio Biondoが自らの「イタリア解説*Italia Illustrata*」の一一巻分をグアルネリオに進呈したこともそれなりの理由があつたことであらう。（Franca Petrucci, “Castiglioni, Guarnerio”, in *Dizionario biografico degli Italiani*, 22, 1979, pp. 161-6 [pp. 161, 165]).

(35) Milan, Biblioteca Ambrosiana, MS B 124 sup., fols. 105-111; Tino Foffano, “Inediti di Guarnerio Castiglioni da codici Ambrosiani”, *Aevum*, 81, 2007, pp. 683-703.

(36) グアルネリオはアンブロジーノ共和国内でも、共和国の没落後も重要な役割を果たした。一四四八年に共和国がヴェネツィアと和平を締結した後には、弁論家として世間の注目を浴びた。またフランチェスコ・スフォルツァが祭典とともにシラノへ入城した際には二つの演説を行った。（Petrucci, “Guarnerio”, p. 165）.

(37) Franca Petrucci, “Castiglioni, Franchino”, in *Dizionario biografico degli Italiani*, 22, 1979, pp. 148-52.

(38) Bayeux, Bibl. Mun., MS 5, fol. 33rv. 以下に刊行されてゐる。Foffano, “Umanisti”, pp. 31-2.

(39) Bayeux, Bibl. Mun., MS 5, fol. 35rv.

(40) *Ibid.*, fol. 36rv.

(41) *Ibid.*, fols. 36v-37r.

(42) *Ibid.*, fols. 33r, 35r.

(43) *Ibid.*, fol. 37rv. 以下に刊行されてゐる。Tino Foffano, “Rapporti tra i Castiglioni di Milano e i Visconti dall'epistolario di Rolando Talenti”, in *Margarita amicorum*, Fabio Fomer, Carla Maria Monti and Paul Gerhard Schmidt (eds.), *Bibliotheca erudita. Studi e documenti di storia e filologia*, 26, Mailand, 2005, 1, pp. 341-51 (p. 350).

(44) それ以前の部分では、例えば一四四三年の文章作品の後半に（Bayeux, Bibl. Mun., MS 5, fols. 36v-37r）一四五九年の作品が（fol. 37rv）それらにちよび一四三一年の作品が続いてゐる（fols. 37v-38v）。

(45) *Ibid.*, fols. 122v-123v, 123v-124r, 124r-125r, 125rv.

(46) *Ibid.*, fols. 125v-126v, 127v.

- (47) Paul-Michel Perret, “Les règles de Cicco Simonetta pour le déhiftement des écritures secrètes”, *Bibliothèque de l'École des chartes*, 51, 1890, pp. 516-25.
- (48) ... *quod si ius civile tibi videtur opus nimis longi laboris, sciltem flecte animum ad iura canonica, in quibus parvo tempore fructum consequi poteris amplissimum* ... (Bayeux, Bibl. Mun., MS 5, fol. 121v).
- (49) *Ibid.*, fol. 107r. キヤノニコンオルナ・ウイスロンテイに宛つられた書簡は以下に刊行やれつゝる。Foffano, “Rapporti tra i Castiglioni di Milano”, pp. 347-9 (Zitat: p. 349).
- (50) *Nam cum tanta vis virtutis sit, ut M. Tullius ait, ut quos, nunquam vidimus, diligamus; quo te amore complectar* [...] (Bayeux, Bibl. Mun., MS 5, fol. 107r [Foffano, “Rapporti tra i Castiglioni di Milano”, p. 348]).
- (51) *Dico autem virtutes et litterarum scienciam, que obscuro etiam et infimo loco natos ubicunque nobilitant et ad alta gloriosissime provehant* (Bayeux, Bibl. Mun., MS 5, fol. 104r).
- (52) *Hos itaque tibi thesauros accumula, doctissime Guiniforte, his montibus adolescentiam tuam exorna, que te, quocunque ieris, comitentur, que te in omni regione locupletem, splendidum et honoratum efficiant* (*ibid.*, fol. 104r).
- (53) *Ibid.*, fols. 97r-98r. (以下に刊行やれつゝる。Foffano, “Umanisti”, pp. 32-3)
- (54) Bayeux, Bibl. Mun., MS 5, fol. 98rv. (以下に刊行やれつゝる。Tino Foffano, “Tommaso Franco, medico greco alla

- corde del cardinal d'Inghilterra Henry Beaufort e di Carlo VII di Francia”, *Aevum*, 74, 2000, pp. 657-67 [pp. 665-6]).
- (55) 以下にこゝに以下を参照。Nowak, “Codex”, pp. 67, 79-92.
- (56) この二人の司教については、シルナル・マイウーの手書きの論考を参照。この論考を私に閲覽やせつくれたロルフ・グローゼ教授 Prof. Dr. Rolf Große (DH I Paris) に感謝す。Bernard Mahieu, *Deux évêques de Bayeux et leur diocèse au milieu du XV^e siècle. 1431-1479. Zanon de Castiglione et Louis d'Harcourt*, Thèse de l'École des Chartes, 1942).
- (57) ローランド・タレンティは写本作成までの二〇年以上をイングランド人統治下のノルマンディーで過していった。ザノーネ・デイ・カステイリオーネはイングランド人から信頼を受け、彼らと密な関係を持っていた。それゆえ、親イングランド傾向の書簡は存在したはずだ。枢機卿ケンブとグロスター公に宛てた書簡が写本中にはたった二通しか存在しないことは特徴的である。この二通の書簡では彼らの統治下でのノルマンディーの荒廢が批判されている。これについては脚注一九を参照。

(フツパータール大学博士研究員)